

ざいそう

## 建設施工分野の海外協力に携わって —ベトナム「第1交通技術訓練校」を訪ねる旅—

中澤 秀吉



2005年12月中旬にベトナム旅行を実施した。今回の目的は道路建設機械の技術者を養成するための第1交通技術訓練校を訪ねることにあつた。私の訓練校訪問は2回目で、1999年道路建設機械技術者養成計画事前調査団に参加したのが最初であつた。

当時ベトナム政府はドイモイ（刷新）政策の下、継続的な経済成長を目標としており、このためのインフラ整備を重要な課題としていた。道路建設事業においても、建設機械の近代化が急速に進んでいるが、それらの運転及び保守・点検のできる技術者が不足しているため、使用している建設機械の修理ができない場合もあり、円滑な施工の妨げとなつていた。そのため、時流に沿った道路建設技術者の養成が求められていた。

交通運輸省直轄の第1交通技術訓練校は、唯一の全国レベルの道路建設技術者訓練機関であるが、体制・設備の不備により十分な技術者を養成できていないことから、ベトナム政府は、我が国に対し同訓練校の訓練能力の向上を目的とした技術協力を要請してきた。

本計画は、無償資金協力・技術協力により訓練校内に新たな施設を建設するとともに、年間約250人の熟練技術者を養成し、道路整備事業の効率化、活性化に資することを目的に道路建設技術者養成計画が2001年1月～2006年1月（5年間）で開始された。

日本から長期専門家5名が赴任しベトナム国における道路建設技術者訓練のモデル校となるため、①ベトナム教員に対して道路建設機械の操作・整備方法を指導し質の向上を図る、②道路建設技術者の再訓練コース（新設）のためのカリキュラムとテキストを開発し、機能的・効率的な訓練の実施、③訓練コースに必要な機材を整備する、等を実施した。

私は、プロジェクト開始前の事前調査団の一員として参加したこと、ベトナム人教員28名の日本国内研修（2～3カ月間）のカリキュラムの作成、講師の決

定、実施場所の選定等の訓練校との係わりを持ったことからプロジェクトが終わる前にどうしても訓練校を訪問し長期専門家の木下氏、井上氏、近藤氏、剣地氏、ベトナム人教員の方々、現地JICA関係者とお話がたくさんベトナム訪問となった。

訓練校は新たに建設された施設で、新設のカリキュラム、ベトナム語のテキスト、新たな教材でベトナム人教員による授業と熱心に勉強に取り組んでいる生徒を拝見しその成果が達成されていることに感動しました。長期専門家が引き上げた後も、訓練校の運営に必要な総合的なマネジメント技術、建設機械の運転・整備、道路建設施工・品質管理等の専門技術の移転が行われ、ベトナム国の発展に資する技術者の育成が図られることでしょう。

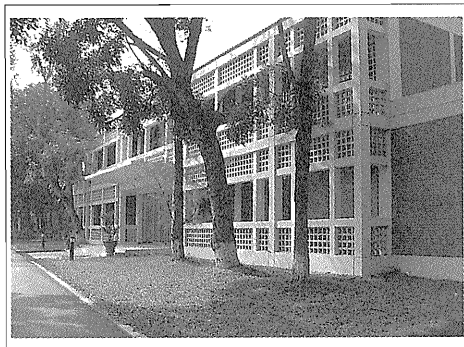
木下氏の案内で国道18号バンチャイ橋（全長903m、幅員25.3m、4車線、斜張橋）の建設現場見学した折、日本の建設会社責任者は、世界遺産に指定されているハロン湾上の橋のため環境、景観保護に重点をおいていること、日本人技師の指導でベトナム人が高度な建設を行っている、しかも予定より2カ月も工程が進んでいることを聞き勤勉さ、能力の高さを実感した。

現在ベトナムの道路建設事業における円借款額は非常に大きく各所で道路建設、橋梁建設が進められて地域の発展に寄与している。また、ベトナムにとって道路建設機械の最大の輸入相手国は日本であり、当該分野で我が国が果たす役割は大きくなっている。

数年前に比べて北部のハノイ周辺は大きく変わってきている。空港からハノイ市内に向かう国道沿いの工業団地に日本の大手会社が多数進出し活況を呈している。ハイウェイの交通量も非常に増大している。

私と海外協力の関係は、建設省に在職中の1971年タイ道路技術訓練センターに専門家として3年間、エジプト建設機械訓練センター巡回指導、ベトナム訓練校事前調査、日本建設機械化協会在職中海外からの研修生受け入れJICA研修「建設機械管理・整備」「建設施工監理」を担当したことです。

今後とも、NPO法人国際建設機械専門家協議会（略称セコネック）を通して発展途上国の道路建設、建設機械の有効活用を図る技術移転活動を続けて行きたいと考えている。



写真—1  
ドミトリ—棟／外観

—なかざわ ひできち 前社団法人日本建設機械化協会調査部長/  
株式会社新潟トランスス除雪機事業部部長—